

◎「三崎城跡」「宗呂城跡」「小馬場城跡」「斧積城跡」調査

市史編集委員松田直則氏と市史調査協力員尾崎召二郎氏が12月11～13日(金～日)の3日間、本市で中世山城調査を行った。11日は三崎城跡、12日は宗呂城跡と小馬場城跡、13日は斧積城跡、以上4城跡を調査し、その縄張図の下図を描いた。

三崎城跡は、今回新たに旧『市史』で認知されていなかった下城部分も縄張図に加えることができた。宗呂城跡は、旧『市史』には描かれていない切り通しを発見した。小馬場城跡は西側斜面に連続縦堀が3条続くなど敵と対峙するためかなり緊張感がある山城構造であることが分かった。小筑紫と三原方面の2ヶ所から谷筋を攻めてくる軍勢に対しての防御を強く意識していると思われる。また、北と東方向の水陸の動向を展望台・監視できる位置に城が置かれている。斧積城跡は、本丸北側に高い土塁があり、堀切や堅堀を巡らした守りの堅い山城であった。大岐左京介の支城であり、北東側は沼状の湿地で敵の侵入を阻止するための効果があったと思われる。両氏とも満足の様子で無事調査を終えることができた。このように今回の3日間の調査で新たに分かったことがたくさんあり、成果の多い調査であった。



宗呂城跡内にある猪囲いの石を計測



斧積城跡の本丸土塁



縄張図の下図を描く松田直則市史編集委員



斧積城跡全景

◎「震洋特攻艇格納壕測量調査」ほぼ終了！

昨年度から本年度にかけて、市内小江地区に所在する震洋特攻艇格納壕の測量調査が少しずつ実施されてきた。これを中心的に実施したのは、市史編集委員・出原恵三氏である。出原氏は、弥生時代が専門の考古学者であるが、戦争遺跡についても戦争遺跡保存全国ネットワーク共同代表であり、その研究も超一級である。今回の測量は全国的にも残存例が少ない震洋格納壕である。その図面化は貴重な戦争遺跡の資料になることは間違いない。冷たい西風に手をかじかめながらも一つ一つコツコツと測量数値を書き込みながら作図。出原恵三氏の粘り強い調査魂に敬服。



市史編集委員・出原恵三氏の調査の様子。測量助手は生涯学習課・吉本工心職員。

「市史執筆のブレイクタイム(16)」

“市制発足”

市史編集委員長 田村 公利

「市制発足前夜」

昭和29年(1954)現在、全国の町村数は約9,558あり、人口8,000人未満の小規模町村は、その約86%にも及んだ。当時の自治庁は全国の約9,558町村を合併により約3分の1にまで減らそうとしていた。一方、高知県では、全169町村中で8,000人以上の町村がわずか9.5%(16町村)であり、そ

のほとんどが小規模町村であった。

そこで2～3の役場を統合し、できるだけ無駄を省き、統合により規模を大きくしてから人口増加によって得られる税収の増加を期待していた。また、町村合併促進法は、合併市町村には、かなり最初は甘い汁がもたらされた。例えば、議員身分一年間保持、議員定数増加、地方税課税不均一を3年間容認、地方交付税交付金における配慮、特別起債、国有林払い下げ等々の特典が与えられた。合併すれば豊かになるという幻想は市制発足当時まことしやかにささやかれていたのである。この合併ブームは、おいてけぼりをくraitakくないとの各々の町村の思惑も絡み、慌ただしい中であまりにも淡々と進められていった。

明治以降、度々政府は合併を試みてきた。明治21～22年（1888～1889）にかけて「明治の大合併」が進められ、71,314あった全国の町村は39市と15,820町村となった。小学校や戸籍の事務処理が円滑にできるようにするため300～500戸を基準にしてこれを実施した。

4町が合併して土佐清水市が誕生したのは、「昭和の大合併」の流れである。この推進は昭和28年から36年にかけて行われた。中学校1校を効率的に設置管理していくために人口規模8,000人を標準として町村の合併を推進した。この結果、昭和28年（1953）10月に8,968あった市町村数は昭和36年（1961）6月には3,472に減少した。

その後の「平成の市町村合併（平成11年から推進）」では、自治体数1,000を目標に自主的な市町村合併を推進させた。この合併の問題は、安易に地名が改称されたことである。これまで何百年と育まれてきた歴史的な地名が、熟慮もなく簡単な住民投票によって改称され、消え去っていった。

「4町合併『土佐清水市の誕生』」

昭和の大合併においてその流れは加速した。昭和29年3月31日、幡多郡では中村町と宿毛町がそれぞれ周辺町村を合併して市制を施行した。

この流れは渭南四町でも熱を帯び、これに沿うように大正13年（1924）9月15日、清松村は清水町となり、昭和16年に上灘村を編入した。昭和22年（1947）11月3日、三崎村も三崎町となった。続いて昭和25年（1950）11月3日、下川口村と伊豆田村がそれぞれ下川口町と下ノ加江町になった。清水町と三崎町は当初から合併に積極的であり、下ノ加江町もこれに踏み切った。

しかし、下川口町だけは賛否両論があり町議会でも対立が続いた。昭和29年4月8日、下川口町議会では合併不賛成が可決された（賛成6票、反対8）。賛成票を投じた議員たちは、揃って辞表を提出した。町民間でも騒動となり、副知事溝渕増己氏、県議会議員仮谷忠男・中平博両氏が下川口町に駆けつけて反対議員8名を説得した結果、反対議員も受諾し、議員協議会において一転して合併に賛成することとなった。

その後、4町は足並みを揃え、4月30日「土佐清水市議定書」が取り交わされて「土佐清水市建設計画」が作成された。「土佐清水市議定書」では市議会議員の任期と定数、一般職の身分、支所の位置、条例及び規則などの処置について取り決められた。「土佐清水市建設計画」では合併の形式、市役所及び支所の位置、小学校及び中学校の位置などの整備にかかる計画が立案された。

こうして昭和29年8月1日、土佐清水市は発足した。同年9月2日、第1回市長選挙の結果、福島克明氏が当選して初代市長に就任した。また、市議会議員は清水（定数12）、三崎・下川口・下ノ加江（定数各6）の4選挙区制により、計30名の市議会議員が選出され、土佐清水市運営の体制が整えられた。このようにして新制「土佐清水市」は船出したのである。

【参考文献】中村春利「市制発足」（『土佐清水市史上巻』土佐清水市、1171～1183頁）